

Title	明代の都掌蛮と銅鼓
Sub Title	
Author	和田, 博徳(Wada, Hironori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1978
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.4 (1978. 3) ,p.78(414)- 78(414)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究余滴
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19780300-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明代の都掌蛮と銅鼓

明代に都掌蛮と呼ばれる少数民族が四川省の叙州府南部の山地に居たが、この地域は四川から雲南へ通ずる要道を抑えていたので、明朝では度々、都掌蛮を討伐した。都掌蛮の最も注目すべき特色は銅鼓を数多く使用していたことであるが、未だ知られていないので、ここに紹介したい。

明朝の成化四(1468)年の都掌蛮討伐に関して、国権の成化四年二月癸卯の条に、「提督四川軍務兵部尚書程信、上山都掌蛮之捷、獲銅鼓數十。」とあり、同書の同年二月己未の条に、「四川叙南衛指揮同知李鉉、破山都掌凌霄城、……獲銅鼓十七。」とあり、また明実録の成化四年四月癸巳の条にも都掌蛮討伐の戦果を記して、「所獲銅鼓六十三面。」と見える。

そして、万曆二(1574)年の都掌蛮討伐に関して、国権の万曆二年二月庚申の条に、「四川進都掌蛮銅鼓九十三、有声者六十有四、……鼓以声為上、易千牛、次易七八百牛、皆刻鷲雕螭、奇文異狀、相伝諸葛物。藏鼓二三、即雄長諸蛮。始出劫、必擊鼓、高山諸蛮、聞声並四集、……出劫数勝、皆鼓之靈也、鼓去則蛮運終。」とある。同様な記事は明実録の万曆二年二月癸亥の条にも見えるが、これによって、都掌蛮が銅鼓を千頭あるいは七八百頭にも上る多数の牛と易える程に貴重視していたことや、銅鼓の形態・文様・使用法などを知ることができる。

以上の如く、明朝は都掌蛮を討伐するごとに、多数の銅鼓を戦利品として獲得したが、明実録や国権の記載によると、これらの銅鼓は悉く北京の明廷へ献上されたようである。恐らく当時の明廷では銅鼓を蛮夷の奇怪な所産と蔑視して、その文化的価値などは全く認めず、直ちに銅錢もしくは他の銅器に改鑄したものと思われる。

ところで、蛮司合誌や明史土司伝などを見ても、明代に銅鼓を多く使用した少数民族は都掌蛮の外には存在しない。明代にひとり都掌蛮だけが頗ぶる多くの銅鼓を使用していたのは何故であろうか。これは今後の重要な研究課題であると言わなければならぬであろう。

(和田博徳)